

12. 学生の同行登校による通学路防災マップ作り

小池則満・森田匡俊・落合鋭充・正木和明

1. はじめに

各地で防災マップ作りが盛んに行われている。机上での学習、フィールドワーク（まち歩き）、地図を広げてのワークショップ、成果の取りまとめ、という流れが一般的であると考えられる。これを小学校で行うことは、防災学習として、また地域への啓蒙として有効であると考えられるが、一方で、中山間地の小学校においては以下のような問題がある。

フィールドワークの実施が困難：片道一時間近く歩いて通学していたり、スクールバスを利用して通学している学校も多いことから、学習時間内にフィールドワークを校区全体で行うことが難しい。ある特定の地区のみで行うと、多くの子供達にとっては自分の住んでいる地区以外の場所が対象となるため、自分の住んでいる場所のマップ作りという目的を達せられない。

観察対象地域が線的である：河川に沿って線的に居住地等が広がっている場合、都市部のような面的なマップ作りを行うことが難しい。逆にいえば線的に観察をしていけば、居住地をほぼ把握することができ、通学路が有効な観察ルートとなる。

以上の点を踏まえて、「学生の同行登校」による観察とワークショップを通じた通学路防災マップ作りを行った。

2. 取り組みの概要

対象は岡崎市立常磐東小学校5年生11名を対象とした。おおよそのタイムスケジュールは表1に示すとおりであり、同行登校、紙面によるマップ作り、看板設置、そしてWebGISによるマップ作りとなっている。

同行登校ではそれぞれの場所に学生を送迎し、表2に示すような観察シートに沿った声かけ等、小旗携行による安全確保、写真撮影を行った。表中の文章は、5年生児童の学習範囲を配慮して、ひらがなを多用している。主に風水害、特に土砂災害を想定した内容となっていて、地震等は今回の対象からはずし、話題が発散しないよう配慮している。通学班は8班あり、もっとも遠方では7:00集合であり、約50分をかけて歩いて登校している。

学生による同行登校を行った翌週には紙面による防災マップ作りを行った。学生らが撮影した写真を大判地図に貼り付けながら、表2にある内容の確認を進めた。

その後、児童が図工で作成した作品を防災マップ看板として校区に立てる作業が小学校により行われた。写真1はその一例である。

表1 取り組みのスケジュール

2013年 11月13日（水）	同行登校調査
11月19日（月）	紙面によるマップ作り（2コマ）
この期間に小学校による手作り防災看板を設置	
2014年 1月21日（火）	WebGIS（eコミュニティプラットフォーム）によるマップ作り（3コマ）
2月20日（木）	全校集会で児童が発表

表2 同行登校におけるチェックリスト

	チェック項目	注目点	選んだ理由	大まかな場所
危険な場所	危ない橋	歩道はあるか等 ガードレール・さくの有無		
	危ないがけ	下に落ちる危険 くずれる危険 ガードレール・さくの有無		
	水につかる場所	沢（水）がないか？ みぞにふたがあるか？ ガードレール・さくの有無		
役立つ物	逃げ込める場所	こども110番の家 子どもの家 公民館		
	守るしせつ	砂防（さほう）ダム 急ながけがある場所を示す看板など		
	警察、消防団	防災びちく倉庫 消火器など		



写真1 傾斜地に立てられた看板



写真2 作成された防災マップの一部

WebGIS (eコミュニティプラットフォーム) によるマップ作り (3コマ) を行った。体制としてはNPO法人 DoChubu からのメンバーが2名、AISSから1名が司会進行および技術アドバイザーとして参加するとともに、愛工大の学生3名も参加した。学校側のネットワーク環境の問題から、ノートPCを持ち込んでEコマにログインして行う、という形になった。写真の貼り付けやコメント、通学路の書き入れなどを行い、最後に各児童が発表を行った。

2月には全校発表会として、5年生による防災学習発表会が開催された。ここでは、災害事例、非常食試食、防災マップの紹介 (写真2) などが行われた。

3. 保護者に対するフィードバックアンケート

3月に、全校保護者を対象にアンケート調査を行った。回収数36である。表3に問Aは防災看板をみたかどうか、問Bはハザードマップ (防災マップ) をみたことがあるか、という問に対する回答を示す。半数以上の保護者が看板を読んだと回答しており、地域に対する啓蒙の一助になったと考えられる。特に、ハザードマップを見たことはないという9名のうち4名が看板の内容を読んでおり、児童の作品であれば関心を持ってもらえることもあると言える。大学生の同行登校については回答者全員が賛意を示されたほか、総合的に見てこのような防災学習を小学校で継続して行っていくべきと思うかという、問いに対しても72%が積極的に行うべき、28%が時

表3 クロス集計結果（看板をみたかどうかとハザードマップの所持状況）

問A\問B	自宅に所持している	見たことはある	見たことはない	総計
いくつかの看板の内容を読んだ	6	10	2	18
お子様の看板の内容は読んだ	—	3	2	5
立っているのは見たが内容は読んでいない	3	5	4	12
見たことがない	—	—	1	1
総計	9	18	9	36

間に余裕があれば行うべき、とおおむね肯定的な回答であった。

4. 考察

小学校側の理解・熱意もあって、単なるマップ作りだけでなく、看板設置や集会での発表など、幅広い展開を行うことが出来た。さらに地域の方が見学に来て、実際に枝うちなどの対策を行うなど、「小学校発」の防災マップ活動展開への萌芽となった。また、本学学生も、児童と登校&マップ作りという慣れない作業に対しても柔軟に対応した。

今後の課題としては、防災マップ作りが地域のアラさがしとならないような事前の同意、配慮、誘導が必要と考えられる。たとえば、川を柵で囲むことは、水辺空間から人を遠ざけて、水の事故や水害リスクに対する実感を失わせるという反省事項として議論されることもある。また、小学校での学習と防災分野との連携・理解が必要である。今回は図工作品の活用が行われたが、理科や社会科等の単元にあわせたマップ作りも、有効であろう。